

「災害復興支援の現場から「市民」を問い直す：NGO での市民ソーシャルワーカー育成の取組みに焦点を当てて」



開催日時：2023年1月28日（土）10:30～12:00 実施形態：Zoom

参加者数：9名（運営メンバー含む）

話題提供者：弓削恵則さん(国際 NGO オペレーション・ブレッシング・ジャパン)

コーディネーター：岡本愛香さん

趣旨説明

自己責任が内面化されつつある現代において、誰かに「助けて」と言えることはそう簡単なことではなく、特に災害の際には、そのような声を挙げられない人びとは容易に見棄てられてしまう危険性があります。

その際に、目の前の被害に対処するだけでなく、あらゆる人びとが互いに助け合える社会をどのように構想するのか。一人ひとりの人生経験からどのように支援につなげ、そして支援を再構築していくのか。そして、そのような場面で捉えられる「市民」とはどのような者か。

以上のような問いから「市民であることとは何か？」を検討することが本企画の趣旨でした。

話題提供：

弓削さんはご自身も大震災（阪神淡路大震災、東北大震災）を経験し、二度目の東北大震災ではより深刻な被害を受けた地域に支援物資を届ける活動も個人でしていました。しかし、その中で個人でできることには限りがあると考え、その後「苦難の連鎖を断ち切り、「生きる希望」を届ける」ことをミッションとする現在のご所属に入職されています。

個別化が進み共同体が失われると共に、自己責任論が蔓延する現代社会において、災害や戦争という困難な状況下では、社会的弱者はよりその影響を受け困難な状況に置かれてしまう。自力で支援にたどり着けない方々にどの様に救いの手を差し伸べたら良いのかと考えた弓削さんが辿り着いたのが、市民ソーシャルワーカーの育成でした。

市民ソーシャルワーカーとは、人々の生活上の問題を解決し個人のウェルビーイングを高めることを目指すソーシャルワーカーのスキルを市民が学び実践する働きのことを示します。なぜ、行政ではなく市民が行う必要があるのか。それは、行政の支援はどうしても窓口申請制が多くなり、災害などの余裕がない状況下では申請を上げられない方の支援が難しいこと、またシステムチックに処理せざるを得ない状況があるため、背景の重視よりも目の前の問題を解決することになりがちな状況があることが理由です。

支援の場においては、市民感情の分断が起きていたり、「人に迷惑をかけてはいけない」という思いから「助けて」と声を上げられない人々がいたりします。その解決に必要なのは相手の心の機微に寄り添い、違いを理解するためのブリッジをかけたり、粘り強く

寄り添いながら支援を行うという姿勢や行動になるため、当事者に近いコミュニティにいる市民がその役割を担うことが重要だとお話をされていました。

加えて、支援を行う際に重要なこととして、「痛み」と共にする（共感する）ところから「望み」を共にする関係性へ、当事者の状況に合わせて歩みを進めることを挙げられています。まずはそこにある悲しみや苦しみに共感をする。しかしそこで止まるのではなく、「あなたはどうなりたいのか」の望みを引き出し、目的地と現在のギャップを一緒に描いて解決に向かうことが重要とのことでした。

弓削さんが目指す社会とは、問題を直視し感情で受け止めつつ、その解を真っ向から考え、チャレンジする、そんな誠実な応答ができる社会だと仰います。重要なのは正しい答えを出すことではなく、その役割を担う人々を大切にしつつ、間違っても失敗を受け入れ、またみんなで悩むその誠実サイクルを繰り返していくことであり、それによって社会が成熟していくのではないかとお話をまとめられていました。

話題をご提供頂いた後は感想共有を踏まえた参加者からの質問タイムとなり、社会的に立場の強い人は迷惑をかけ慣れていないので、迷惑をかけられても大丈夫という感覚を持ちづらいのではないかと、頼りあって良いということをお教えるにはどうしたらよいかと言った質問が出ました。弓削さんはじめ参加者の中で話に上がったのは、「自分は人に本当に迷惑をかけていないか」をあらためて問いかけ、私も迷惑をかけるからあなたの迷惑も welcome という認識を広げることが重要ではないか、との考え方でした。

また、災害以外の平時にはどう行動したら良いのかという質問には、これをすれば解決するという明確な答えがあるわけではないので、色々試行錯誤してみること、そして困難を抱えた人と出会う中で感じたことを改めて行動に起こしその反応を見る、といったことを繰り返すことの重要性を示してくださいました。

弓削さんは「年月が経てば経つほど、癒されていない心が蝕まれていく、時は何も解決してくれない」、「解決するのは人」とおっしゃっていましたが、あらためて私たちひとりひとりが、支援を必要としている人が周りにいないかという想像力を働かせ行動してみること、また「弱さを持った人を守る社会」が大切だという考え方や、お互いに「頼っていいんだ」と思える感覚を広めていくことなどが大切なんだと感じた貴重な機会になりました。日々自分のことで精一杯になりがちですが、少しでもその感覚を持ち続け、周囲の人たちにも共有していきたいと思います。

（主な運営スタッフ：岡本、古野、別木、浜田 報告書担当：浜田）